第10回

～洋書絵本の専門店が贈る～

『のんびり洋書めぐり』

Ehon House

(株)岩崎書店 絵本の家事業部 仕入担当
望月真由

写真絵本との思い出

写真絵本と聞いて、どんな絵本を思い浮かべますか？私にとって写真絵本といえば、子どもたちが一定期間その本しか読まなくなる、“子どもを没頭させる絵本”です。息子は小学校低学年頃まで、図書館で借りる絵本は決まって写真絵本でした。一番夢中になったのは、世界のいろいろなものを集めたシリーズ。見たこともない鳥や植物、食べ物の写真を眺めては、添えられた説明を隅々まで読んでいました。その興味は国名や都市名、国旗の暗記などにつながっていきました。動物好きの娘は、動物図鑑を集めていました。ネコ科ばかりを集めた図鑑が大のお気に入りで、毛色や耳、しっぽの形など何度も見比べては一つ一つ名前を覚えていました。図鑑から得た情報が基礎となり、今では我が家の動物博士となっています。

美しいイラストとストーリーで紡がれる絵本だけでなく、ありのままの姿を切り取り、正確な情報として見せてくれる写真絵本は、子どもたちの学びの種をぐんぐんと育ててくれたように思います。どうしてあれほど没頭したのだろう？写真絵本を読んでいる子どもたちの後ろ姿は、まるで絵本に入ろうとしているのでは？と思うほど、好奇心の塊に見えました。今回は、その魅力を調べてみたいと思います。

様々な写真絵本の魅力

一口に写真絵本と言っても、ストーリー性のあるものから図鑑まで実に様々。我が家の子どもたちに人気だったのは図鑑のような写真絵本でしたが、私が学生時代に出会い、強烈な印象を受けた写真絵本は少しテイストの違う、星野道夫『クマよ』(1999年　福音館書店/ISBN：4-8340-1638-2)でした。図書館の絵本コーナーで見つけてふと手に取ると、自然界に生きる荒々しい熊の姿、添えられた力強い叫びのような言葉が飛び出してきました。これまでの絵本の概念を覆され、驚きのあまりその場で本を閉じ、家に帰ってじっくり読んだ記憶があります。自分には、絵本とは子どもたちに寄り添う絵や言葉が詰まった優しい本という固定概念があったと気づかされ、より深い絵本の世界へ誘われたきっかけとなりました。

スマホやデジカメの普及で、写真の撮影が更に身近なものになった今、写真絵本は創作ジャンルとしても、より注目を集めているようです。2020年㈱大空出版は創業20周年を記念して、「日本写真絵本大賞」を開催しました。写真と文章でつづる絵本の新しいジャンルとして「写真絵本」を広めたい。そんな願いから始まった画期的なコンクールは、多くの応募者を集め、次々と魅力あふれる写真絵本を生み出しています。受賞作品を覗いてみると、

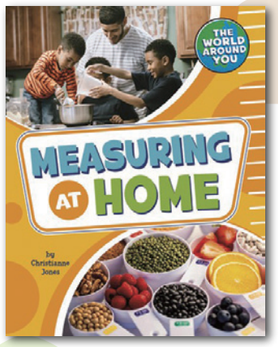
写真と文章から作者の想いが溢れて、掬い取るのに忙しい！写真だけでも美しさや驚きなど、作者のメッセージが伝わってきますが、文章を添えると、あっという間に物語の一場面に早変わり。現実と想像のリバーシブル絵本とでもいうのでしょうか、何度も美味しい、底なしの魅力があります。これが写真絵本の魅力の十八番、見る人を没頭させる、魅惑のスパイスなのでしょうか。

おすすめ写真絵本：Capstone社Pebbleシリーズ

世界の絵本事情に目を向けても、写真絵本は人気があります。特に昨今は、ノンフィクション絵本の出版ラッシュ。ノンフィクション絵本とは、例えば歴史上の人物の生い立ちを史実通りに描いたり、蜂の生態や地球温暖化の現状を紹介したり、情報や事実を子どもたちに忠実に伝えるための絵本です。イラストで描かれたり、写真が使われたり、対象年齢も赤ちゃんから学童期まで実に様々です。こうしたノンフィクション絵本の人気の波に乗り、新スタイルの写真絵本が続々と登場しています。

アメリカの教育図書出版社であるCapstone社。アメリカの小中学校や図書館向けの書籍ラインを得意とし、昨今はデジタル教材への参入も目覚ましく、紙とデジタル両刃でアメリカの学校図書を支えています。1885年、カフラン家によって創業され、もともとは採石業を営んでいました。1990年、新規事業として出版界に進出して以来、時代に先駆けた出版物を次々と生み出しています。

特におすすめなのが、写真絵本で様々な教科が学べるPebbleシリーズ。学校図書館のためのブックカタログ2022秋の増刊号のコラムでご紹介した、探しもの絵本Can you Find it? もこのPebbleシリーズのひとつです。Pebble Sprout（Sprout=新芽）というシリーズ名からもわかるように、「楽しく学ぶ」ことに特化した、現地では幼稚園向けの写真絵本。今回増刊号に掲載された写真絵本のうち、「アメリカの学校で読まれている「生活」の写真絵本」も同シリーズからご紹介しています。また、「アメリカの学校で読まれている「理科」の写真絵本」は、「サイエンスを楽しく学ぶ」ことに特化した、Pebble Explore（Explore=探検する）というシリーズ。現地では小学校低学年から中学年向けの写真絵本として、わかりやすい表現で理科、特に地学を紹介し、子どもたちに“興味がある分野をどんどん探してみよう！”というメッセージを伝えています。



『Measuring at Home』
（Capstone 2022）
Copyright © 2022 by Capstone.

Pebble Sproutシリーズ。“大きさや重さなど、身の回りの物を測ってみよう！”という身近なテーマで英語を学ぶことができます。

英語学習に写真絵本を

このCapstone社Pebbleシリーズを手に取ってみると、前述した写真絵本の魅力である、“何度も美味しい”点がいくつも見つかります。すべて英語で書かれている本を読むことは、英語学習を続ける大人でも躊躇することがあります。初めて第二言語を学ぶ子どもたちも、同じ戸惑いを感じることでしょう。写真絵本は、そんな言語の戸惑いを感じさせず、写真が多くを語ってくれます。

例えば身の回りの自然から色を学べる写真絵本『Colors in Nature』。一面真っ赤なページが飛び出し、真っ赤なベリーの写真、真っ赤なテントウムシの写真、真っ赤なチューリップの写真が並びます。短い英文が添えられていますが、英語がわからなくとも、このページは「赤い」と認識し、「red」という単語を学ぶには十分すぎる視覚的情報を得ることができます。Redという英単語が赤い太字で書かれているのも、うれしい工夫。このページの英文がわからなくとも、真っ赤なものの写真を楽しみ、赤はredということを学び、次のページに進むことができるのです。

写真という単体で存在感の強い媒体を使うことで、英語の絵本でも、わからない箇所を気にせず楽しく読み進めることもできます。応用して、写真を使い、子どもたちに質問を促すこともできますし、子どもたちのレベルに合わせて英語で話しかけることもできます。前述の写真絵本コンクールのように、自由にオリジナルでわかりやすい英文を添えてもっと面白くすることもできます。柔軟な使い方が可能なのも、写真の持つ「情報を伝える力」が圧倒的に強く、言葉がなくともすでに多くを語っているからであり、見ただけで多くの情報を提供されるからこそだと思います。

こうした写真の持つ特性と、英語学習を組み合わせることは、とても画期的なことだと考えます。子どもたちは写真の力を借りて、英語の絵本を開くときに感じる文章への戸惑いを少し軽くすることができるでしょう。写真は見るだけで多くの情報を得ることができ、好奇心を刺激します。その好奇心が柔らかいクッションとなり、英語に感じる戸惑いを和らげ、少しずつ英語が楽しい、英語の絵本を読んでみたいと興味を広げてくれたら嬉しいなと思います。

『Earthquakes』
（Capstone 2022）
Copyright © 2022 by Capstone.

Pebble Exploreシリーズ。アメリカでは、理科の教科書ガイドとしても活用されています。図や写真をふんだんに使い、サイエンスをより身近な存在として学びます。